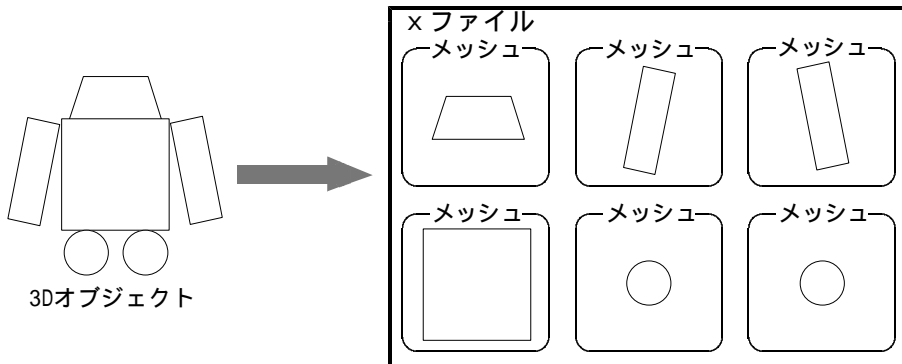


オブジェクト指向と ゲームプログラミング

DirectX Graphics 3D編 - 第12回 xファイルの読み込み

xファイル

xファイルは、DirectX Graphics(Direct3DX)が標準でサポートする3Dオブジェクトの格納形式です。xファイルには、3Dオブジェクトの形状データがメッシュ単位で格納されています。1つのxファイルの中に、複数のメッシュを格納することができ、メッシュごとにマテリアルなどの情報を設定することができます。



xファイルの読み込み

xファイルは、D3DXLoadMeshFromX関数で読み込むことができます。この関数でxファイルを読み込むと、メッシュを制御するためのID3DXMeshインタフェース、隣接面データ、テクスチャのファイル名を含むマテリアル情報の配列、エフェクト、サブセット数が返されます。

D3DXLoadMeshFromX関数

- 説明 -

xファイルからメッシュを読み込みます。

- 書式 -

```
HRESULT D3DXLoadMeshFromX(LPCTSTR pFilename, DWORD Options, LPDIRECT3DDEVICE9 pDevice,
    ID3DXBuffer** ppAdjacency, ID3DXBuffer** ppMaterials,
    ID3DXBuffer** ppEffectInstances, LPDWORD pNumMaterials,
    ID3DXMesh* ppMesh);
```

- パラメータ -

1つ目の引数(pFilename)は、読み込むファイル名です。

2つ目の引数(Options)は、メッシュの作成オプションの指定です。

3つ目の引数(pDevice)は、メッシュに関連づけるIDirect3DDevice9インタフェースのポインタを指定します。

4つ目の引数(ppAdjacency)は、隣接面データを受け取る場合に使用します。必要ない場合、NULLを指定します。

5つ目の引数(ppMaterials)は、マテリアルデータを受け取る場合に使用します。必要ない場合、NULLを指定します。

6つ目の引数(ppEffectInstances)は、エフェクトインスタンスを受け取る場合に使用します。必要ない場合、NULLを指定します。

7つ目の引数(pNumMaterials)は、サブセット数を受け取るDWORD型変数のアドレスを指定します。

8つ目の引数(ppMesh)は、生成されるメッシュオブジェクトのインタフェースを受け取る変数のアドレスです。ID3DXMesh*型またはLPD3DXMESH型の変数のアドレスを指定します。

- 戻り値 -

成功した場合はD3D_OK、それ以外はエラーコードを返します。

```
// xファイル読み込み(pD3DDeviceは、初期化済みのDirect3DDevice9オブジェクト)
ID3DXMesh* pMesh; // メッシュ
ID3DXBuffer* pMtrlBuf; // マテリアル配列のバッファ
DWORD subset; // サブセット数
::D3DXLoadMeshFromX("3DObject.x", D3DXMESH_MANAGED, pD3DDevice,
NULL, &pMtrlBuf, NULL, &subset, &pMesh);
```

D3DXLoadMeshFromX関数で生成したメッシュは、頂点データのフォーマットが読み込んだxファイルによって左右されます。そのため、必要なデータが含まれてなかったり、逆に必要ないデータが含まれている場合があります。

メッシュの頂点データを任意の形式に変更するには、ID3DXMesh::CloneMeshFVFメソッドを使います。このメソッドは、現在のメッシュをもとに、指定したFVFを持つ新しいメッシュを生成します。

たとえば、頂点データが「座標」「法線」「テクスチャ座標」のみの新しいメッシュを生成するには、以下ようになります。

```
// 「座標」「法線」「テクスチャ座標」のみのメッシュを生成する
ID3DXMesh* pNewMesh;
pMesh->CloneMeshFVF(pMesh->GetOptions(), D3DFVF_XYZ | D3DFVF_NORMAL | D3DFVF_TEX1,
pD3DDevice, &pNewMesh);
```

CloneMeshFVFメソッドを使うことにより、指定したフォーマットを持つ新しいメッシュを生成することができますが、もとのメッシュにない情報は、そのデータを格納する場所しか生成することができません。

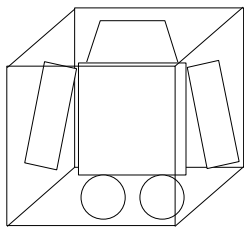
xファイルによっては、法線(頂点の向きを示すベクトル)がない場合があります。法線がない場合、光を反射することができないので、レンダリングしても色は付きません。

このような場合は、D3DXComputeNormals関数を使います。この関数は、頂点に隣接する面の向きの平均をとり、頂点に法線を設定します。

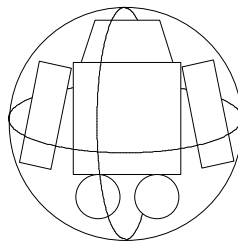
```
// 法線を計算によって求める
D3DXComputeNormals(pNewMesh, NULL);
```

バウンディングボリューム

バウンディングボリューム(境界ボリューム)とは、3Dオブジェクトに設定された3次元の空間のことをいいます。バウンディングボリュームには、形状によってバウンディングボックス(境界ボックス)とバウンディングスフィア(境界球)があります。



バウンディングボックス



バウンディングスフィア

バウンディングボリュームは、3Dオブジェクトの大きさを調べるときや、3Dオブジェクト同士の衝突検出などに用いることができます。

Direct3DXは、3Dオブジェクトを包括するバウンディングボックスを求めるD3DXComputeBoundingBox関数と、3Dオブジェクトを包括するバウンディングスフィアを求めるD3DXComputeBoundingSphere関数を提供しています。

CDXGraphics9クラスに、xファイルからメッシュを生成する機能を追加しましょう。

(1) CDXGraphics9クラスに、xファイルからメッシュを生成するCreateMeshFromX関数を作成します。以下のプログラムを完成させて適切な場所に追加しましょう。

```

/*****
/*
/*                      メッシュ生成                      */
/*****
IMesh* CDXGraphics9::CreateMeshFromX(LPCTSTR inFileName)
{
#ifdef _DEBUG
    if(m_pD3DDevice == NULL) {
        ::OutputDebugString("*** Error - Direct3DDevice9未初期化(CDXGraphics9_CreateMeshFromX)\n");
        return NULL;
    }
#endif

    // xファイル読み込み
    IMesh*      pMesh;
    ID3DXMesh*  pDXMesh      = NULL;
    ID3DXBuffer* pDXMtrlBuf  = NULL;
    DWORD       subset;
    try {
        if(!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!(inFileName, D3DXMESH_MANAGED, m_pD3DDevice,
                                NULL, &pDXMtrlBuf, NULL, &subset, &pDXMesh) != D3D_OK)
            throw "*** Error - xファイル読み込み失敗(CDXGraphics9_CreateMeshFromX)\n";

        // 頂点データを「座標」「法線」「テクスチャ座標」のみにする
        const DWORD  FORMAT      = pDXMesh->GetFVF();
        const DWORD  NEW_FORMAT  = D3DFVF_XYZ | D3DFVF_NORMAL | (D3DFVF_TEX1 & FORMAT);
        if(NEW_FORMAT != FORMAT) {
            // 必要なデータのためのメッシュに再構築する
            ID3DXMesh*  pDXNewMesh;
            if(pDXMesh->CloneMeshFVF(pDXMesh->GetOptions(), NEW_FORMAT, m_pD3DDevice, &pDXNewMesh)
                != D3D_OK)
                throw "*** Error - メッシュ再構築失敗(CDXGraphics9_CreateMeshFromX)\n";

            // 法線がない場合、色が付かないので法線を計算する
            if((FORMAT & D3DFVF_NORMAL) == 0)
                ::!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!(pDXNewMesh, NULL);

            pDXMesh->Release();          // 古いメッシュの解放
            pDXMesh = pDXNewMesh;
        }
    } catch(LPCSTR ErrorString) {
        // 失敗した場合はNULLメッシュを返す
        ::OutputDebugString(ErrorString);

        SafeRelease(pDXMesh);
        SafeRelease(pDXMtrlBuf);

        pMesh = new CNullMesh();
        m_Mesh.push_back(pMesh);

        return pMesh;
    }

    // メッシュオブジェクトを生成し、リストへ追加
    pMesh = new CMesh(m_pD3DDevice, pDXMesh, subset);
    pDXMesh->Release();
    m_Mesh.push_back(pMesh);

    // ファイルパス取得
    TCHAR  Drive[_MAX_DRIVE + 1];
    TCHAR  Dir  [_MAX_DIR  + 1];
    ::_splitpath(inFileName, Drive, Dir, NULL, NULL);

    // マテリアル設定
    LPD3DXMATERIAL  pMaterial = (LPD3DXMATERIAL)pDXMtrlBuf->GetBufferPointer();
    for(DWORD i = 0; i < subset; i++) {
        // マテリアル設定

```

```

pMesh->SetMaterial(i, pMaterial[i].MatD3D);

// テクスチャファイル名設定 (×ファイルのパス + ファイル名にする)
TCHAR file_name[MAX_PATH + 1];
::wsprintf(file_name, "%s%s%s", Drive, Dir, pMaterial[i].pTextureFilename);

// テクスチャ設定
pMesh->SetTexture(i, FileName);
}
pDXMtrlBuf->Release();

return pMesh;
}

```

(2)メッシュクラスにバウンディングボリュームを返す機能を追加します。以下のバウンディングボックス構造体とバウンディングボリューム構造体を適切な場所に追加しましょう。

```

// バウンディングボックス構造体
struct DXGBOUNDINGBOX {
    D3DXVECTOR3 Min; // 境界ボックスの左下隅の座標
    D3DXVECTOR3 Max; // 境界ボックスの右上隅の座標
};

// バウンディングスフィア構造体
struct DXGBOUNDINGSPIHERE {
    D3DXVECTOR3 Center; // 境界球の中心の座標
    float Radius; // 境界球の半径
};

```

(3)メッシュクラスにバウンディングボリュームを返す関数を追加します。以下のプロトタイプをIVertexBufferクラス定義の適切な場所に追加しましょう。

```

virtual DXGBOUNDINGBOX GetBoundingBox() = 0;
virtual DXGBOUNDINGSPIHERE GetBoundingSphere() = 0;

```

(4)CMeshクラスにバウンディングボリュームを返す関数を追加します。以下のプログラムを完成させ、適切な場所に追加しましょう。

```

/*****
/* バウンディングボックス取得 */
*****/
DXGBOUNDINGBOX CMesh::GetBoundingBox()
{
    // メッシュの頂点バッファを得る
    IDirect3DVertexBuffer9* pVB;
    m_pMesh->GetVertexBuffer(&pVB);

    // バッファへのポインタを得る
    LPVOID pVertices;
    pVB->Lock(0, 0, &pVertices, D3DLOCK_READONLY);

    // バウンディングボックスを計算する
    DXGBOUNDINGBOX box;
    ::????????????????????((D3DXVECTOR3*)pVertices, m_pMesh->GetNumVertices(),
    ::D3DXGetFVFVertexSize(m_pMesh->GetFVF()), &box.Min, &box.Max);

    pVB->Unlock ();
    pVB->Release();

    return box;
}

/*****
/* バウンディングスフィア取得 */
*****/
DXGBOUNDINGSPIHERE CMesh::GetBoundingSphere()
{
    // メッシュの頂点バッファを得る
    IDirect3DVertexBuffer9* pVB;
    m_pMesh->GetVertexBuffer(&pVB);

    // バッファへのポインタを得る

```

```

LPVOID pVertices;
pVB->Lock(0, 0, &pVertices, D3DLOCK_READONLY);

// バウンディングスフィアを計算する
DXGBOUNDINGSPHERE sphere;
::????????????????????????????????(D3DXVECTOR3*)pVertices, m_pMesh->GetNumVertices(),
::D3DXGetFVFVertexSize(m_pMesh->GetFVF()), &sphere.Center, &sphere.Radius);

pVB->Unlock ();
pVB->Release();

return sphere;
}

```

(5) CNullMeshクラスにバウンディングボリュームを返す関数を追加します。以下のプログラムを適切な場所に追加しましょう。

```

/*****
/* バウンディングボックス取得 */
/*****
DXGBOUNDINGBOX CNullMesh::GetBoundingBox()
{
    DXGBOUNDINGBOX box;
    ::ZeroMemory(&Box, sizeof(box));

    return box;
}

/*****
/* バウンディングスフィア取得 */
/*****
DXGBOUNDINGSPHERE CNullMesh::GetBoundingSphere()
{
    DXGBOUNDINGSPHERE sphere;
    ::ZeroMemory(&Sphere, sizeof(sphere));

    return sphere;
}

```

(6) メッシュクラスにメッシュを最適化する機能を追加します。以下のプログラムを適切な場所に追加しましょう。

```

/*****
/* メッシュ最適化 */
/*****
bool CMesh::Optimize(const DWORD inFlags)
{
    ID3DXMesh* pOptMesh;
    if(m_pMesh->Optimize(inFlags, NULL, NULL, NULL, NULL, &pOptMesh) != D3D_OK) {
        ::OutputDebugString("*** Error - メッシュ最適化失敗(CMesh_Optimize)\n");
        return false;
    }

    m_pMesh->Release();
    m_pMesh = pOptMesh;

    return true;
}

```

CMesh::Optimize関数の仕様は、以下のとおりです。

Optimize その他

メッシュの面および頂点の順番を変更し、パフォーマンスを最適化します。

書式	bool Optimize(const DWORD inFlags);
Return	成功 : true それ以外 : false
inFlags	最適化の種類を指定。おもに、次のフラグの組み合わせを指定 D3DXMESHOPT_COMPACT 面の順番を変更し、使用されていない頂点と面を削除する

D3DXMESHOPT_ATTRSORT
 ID3DXMesh::DrawSubsetのパフォーマンスを上げるため、面の順番を変更する
 D3DXMESHOPT_VERTEXCACHE
 面の順番を変更し、頂点キャッシュのキャッシュ ヒット率を向上させる
 D3DXMESHOPT_STRIPPREORDER
 面の順番を変更し、隣接する三角形の長さを最大にする
 D3DXMESHOPT_IGNOREVERTS
 面のみを最適化し、頂点は最適化しない
 D3DXMESHOPT_DONOTSPLIT
 属性のソート中に、属性グループ間で共有している頂点を分割しない

(7) IMeshクラスにOptimize関数の純粹仮想関数、CNullMeshクラスに「trueを返す」Optimize関数を作成しましょう。

(8) xファイルを読み込んで描画してみます。CTestScene::CTestScene関数を以下のように変更しましょう。

```
CTestScene::CTestScene()
{
    // ここに、機能テストの初期化処理を記述します
    // カメラ視野設定
    DXGCamera()->SetProjection(30.0f, 640.0f, 480.0f, 0.1f, 1000.0f);

    // カメラ位置、角度設定
    DXGCamera()->SetView(D3DXVECTOR3(0.0f, 0.0f, -5.0f), D3DXVECTOR3(0.0f, 0.0f, 0.0f));

    // xファイル読み込み
    m_pMesh = DXGraphics().CreateMeshFromX("xファイルの名前.x");

    // ライト設定
    D3DLIGHT9 light;
    light.Type = D3DLIGHT_DIRECTIONAL; // ディレクショナルライト
    light.Diffuse = D3DXCOLOR(1.0f, 1.0f, 1.0f, 1.0f); // ディフューズ色
    light.Ambient = D3DXCOLOR(1.0f, 1.0f, 1.0f, 1.0f); // アンビエント色
    light.Specular = D3DXCOLOR(1.0f, 1.0f, 1.0f, 1.0f); // スペキュラ色
    light.Direction = D3DXVECTOR3(0.0f, -1.0f, 0.0f); // ライトの向き(下)
    DXGraphics().SetLight(0, light, TRUE); // ライトを設定

    FPSTimer().Reset(); // タイマリセット
}
```

(9) CTestScene::ActiveProc関数を以下のように変更しましょう。

```
int CTestScene::ActiveProc()
{
    // ここに、機能テストのメイン処理を記述します

    // ここに、機能テストの描画処理を記述します
    if(FPSTimer().IsSkip())
        return 0;

    DXGraphics().Clear(D3DCLEAR_TARGET | D3DCLEAR_ZBUFFER, D3DXCOLOR(0.0f, 0.0f, 0.5f, 0.0f));

    DXGraphics().BeginScene();

    m_pMesh->Render(); // メッシュのレンダリング

    DXGraphics().EndScene();

    DXGraphics().UpdateFrame();

    return 0;
}
```